

お知らせ

秋季シンポジウム「人と音・音楽 — 日本の癒しにおける原点」

生活美学研究所では、令和元年12月8日（土）に第29回秋季シンポジウムを開催いたしました。

「人と音・音楽—日本の癒しにおける原点」をテーマに、精神医学・音楽療法史、そして臨床心理学の各領域から3名の講師による講演とパネルディスカッションを行い、多数の方にご来場いただきました。

精神科医・音楽療法士の牧野英一郎氏から、「臨床の場からみた日本の感性に基づく音・音楽」をテーマに、阪神淡路大震災など各被災地や医療現場でのご実践から、日本の感性に馴染む音楽と癒しを学びました。

また光平有希氏からは、「日本における音楽療法の歴史的展開」をテーマに、江戸期から息づく音楽療法の理論をはじめ、現存する最古の精神病院「松沢病院（旧巣鴨病院）」で、明治期からすでに音楽療法が取り入れられていたことが報告されました。当時人気のあった「さくら音頭」を替え歌にした「松沢音頭」をご紹介くださり、本学音楽学部3年の岡部祐希さんが、その歌と津軽三味線の演奏を披露し、牧野先生のバイオリンと会場からの手拍子の響きが甲子園会館に華やきを添えました。

臨床心理士である森岡正芳氏は、「人と人・人と音の間にあるもの—日本の精神性を“間”から考える」として、間（ま）をキーワードとした関係性について語り、シンポジウム後半のパネルディスカッションでは、会場からの質問に基づく鼎談によって、さらに内容の深まるディスカッションが繰り広げられました。（松本佳久子：コーディネーター、生活美学研究所員）

Renaissance Symposium
文化力
29th
第29回秋季シンポジウム

12
7 sat

13:30 開 会
開会挨拶 森岡正芳（生活美学研究所長）

13:40 講 演 1 牧野英一郎
「臨床の場からみた日本の感性に基づく音・音楽」

14:20 講 演 2 光平有希
「日本における音楽療法の歴史的展開」

15:00 講 演 3 森岡正芳
「人と人・人と音の間にあはれ—日本の精神性を“間”から考える—」

15:40 休 憩

15:55 パネルディスカッション 進行：松本佳久子

17:15 閉 会

森岡正芳
立命館大学教授
「人と人・人と音の間にあはれ—日本の精神性を“間”から考える—」

松本佳久子
コーディネーター
生活美学研究所員

光平有希
関西日本文化研究センター
特任助教

牧野英一郎
医療法人社団 緑風会
大阪府中央病院 理事長・院長

人と音・音楽
日本の癒しにおける原点

立命館大学生活美学研究所 第二十九回秋季シンポジウム



牧野 英一郎 氏
(医療法人社団 総合会 武蔵野中央病院 理事長・院長)



光平 有希 氏(国際日本文化研究センター 特任助教)



松沢音頭の歌と演奏
(ヴァイオリン:牧野英一郎氏(右)、歌・津軽三味線:岡部 祐希
(音楽学部3年、中央)、津軽三味線:松本佳久子准教授(左))



森岡 正芳 氏(立命館大学教授)



パネルディスカッションの様子